

## あまんきみこ『白いぼうし』を〈語り手〉の位相から読み、作品価値を掘り起こす

丸山 義昭

- ・本文は、『新装版 車のいろは空のいろ 1 ——車のいろは空のいろ——白いぼうし』（ポプラ社 2004年刊）による。
- ・連作である同書所収のほかの短篇を参考にすることはしないで、『白いぼうし』単独で考えることとする。
- ・本報告は、田中実「『白いぼうし』の罪と愛」（田中実・須貝千里・難波博孝編著『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』（明治図書 2023年））に学びながら、読みの原理として捉えたこと、補足的・発展的に深め、考えたことを書いたものである。

## (1) 田中論文に学び、読みの原理をおさえ、この作品について考える

- ① 〈物語童話〉〈小説童話〉は田中実の用語であるが、〈了解不能の他者〉の世界＝〈向こう〉を抱え込んでいるのが〈小説童話〉である。『白いぼうし』は〈小説童話〉である。
- ② 明治期、フィクションである〈近代小説〉はリアリズムをベースにして始まったが、フィクション性を極力排除しようとしたのが、日本の自然主義文学である。しかし、近代的な物理法則に反することを書かれているのが〈近代小説〉であり、それをリアリズムで合理化して読むことは、〈近代小説〉の本然に反する。それでは作品の生命を生かし、価値を深く掘り起こすことはできない。
- ③ 各主体に応じた、それぞれの「現実」＝主観的現実があるに過ぎない。その向こうに「客観的現実」があるのではない。そして、「現実」は「非現実」を抱え込んでいる。松井さんのまなざしが捉えている「現実」は、女の子が現れたり、チョウの声が聞こえたりというような「非現実」を抱え込んでいる。
- ④ 言葉の力によって「現実」は作られている。「現実」は言語によって制作された世界である。
- ⑤ 松井さんの主観的現実の向こうに客観的現実があるとして、近代的リアリズムの枠組みで読むと、女の子の出現やチョウの声を、幻想・幻聴と位置づけがちになり、それではこの作品の生命が生かされない。
- ⑥ この作品のプロットについて、押さえるべき要点は次の通りである。故郷にいる母親から夏みかんが送られてきた松井さんは機嫌がよく、夏みかんをタクシーの中に置く。車道のすぐそばに落ちているぼうしのことを心配した松井さんは結果的にチョウを助けてしまった。落胆するであろう男の子のために、チョウの代わりとして夏みかんを置く。松井さんのタクシーの後部座席に女の子がいつの間にか乗っているが、これは逃れることができたチョウが女の子になったものと思われる。（もちろんその時の松井さんには分からない。）松井さんは女の子にせかされ、「なの花橋」へと車を走らせるが、女の子の姿は消えている。そこに「よかったね。」「よかったよ。」という「小さな小さな声」が聞こえてくるが、これはチョウ（女の子）の生還を喜び合っているチョウたち（家族や仲間たち）の声と思われる。松井さんも気がつくであろう。
- ⑦ 語り手の位相に立って、作品を構造化して捉え、プロットの、さらに深層を読むことが肝要である。構造化し、深層を読みとるためには、「現実」のさらに外部である〈了解不能の世界＝言語以前の世界＝向こう〉を措定する必要がある。措定することによって、人類の文明・文化を相対的に捉えることができる。
- ⑧ そのように読んだ時に、チョウの世界が人間の世界と同様、自立した世界として見えてくる。そこから「現実」を相対化することができ、人間の罪と同時に、「夏みかん」の愛の働きも浮かび上がってくる。
- ⑨ つまり、〈語り手〉は、〈向こう＝外部〉を見ながら語っている。チョウのまなざしからも人間世界を見ている。人間の加害性というかたちで、人間の「罪」を抉り出し、人間の文明・文化を相対化しているのである。
- ⑩ 〈語り手〉は、〈外部〉からのまなざしによって、三つの家族愛や仲間愛（松井さんと母親・男の子と母親・チョウの家族や仲間たち）を等価に捉えている。
- ⑪ 松井さんを超えた〈語り手〉のまなざしから見ると、「夏みかん」の働きがよく分かる。「夏

みかん」の愛の力がチョウに届いていることを、〈語り手〉は松井さんにチョウの声を聞かせることによって伝え、チョウの喜びを松井さんにも分け与えている。男の子にもチョウにも松井さんにも「夏みかん」の愛の力が及んでいる。そのことによって、人間の罪はやさしく浄化される。

## (2) 先行研究を読む

① 近年の先行研究を読んでみよう。

最初は、鶴谷憲三「におい・意味の変容——『白いぼうし』論」（田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編4年』教育出版 2001年）である。

鶴谷は次のように書いている。（傍線は丸山・以下同じ）

より厳密に言えば、松井さんは日常的な空間と非日常的空間との間の、いわば〈蝶番〉にあたると思うのである。蝶番とは、戸やふたが開閉できるように取り付けられた金具であり、扉はこれによって開く。つまり異質の空間と異質の空間のいずれをも見透す眼・心情の持ち主でなければ蝶番たる資格はない。

（略）

それでは蝶番たる資格を有しているとはどういうことだろうか。端的に言えば、異なる領域のいずれをも見晴かす眼の持ち主であり、 どういう状況をも受け入れうる豊かな感性の持ち主ということになる。『白いぼうし』にはお客のしんしに始まり、人間では、いなかのおふくろ、たけのたけお君とその母、ちょうの化身であるおかっぱの女の子が登場してくる。また、夏みかん、白いぼうし、やなぎ、クローバー、たんぼぼ等の動植物・事物が配置されている。蝶番にあたる松井さんの感性（ひいては作者あまみきみの感性と言い換えることも可能であろう。）では、そのいずれもが等価なはずである。そのことを可能にするのが、「夏みかん」の「におい」に象徴される素朴さ、土の香りなのである。松井さんの素朴さ、喜びを喜びとする飾り気の無さ、白いぼうしと夏みかんとを交換する思いつき、いずれをとっても蝶番たる要件を十分に満たしていよう。

- ② 最初の傍線部についてだが、松井さんにとっては、日常的な空間も非日常的空間も、「現実」である。その「現実」と、さらにその「外部」との蝶番の位置にいるのが松井さんである。その「外部」を措定しないために、松井さんのいる人間世界の文明・文化を相対化して捉えることが徹底されない。人間の「罪」の問題が前景化してこないのである。
- ③ 二つめの傍線部について。「客観的現実」があるという枠組み（近代的リアリズムの枠組み）で捉えようとするから、松井さんを「異なる領域のいずれをも見晴かす眼の持ち主であり、どういう状況をも受け入れうる豊かな感性の持ち主」としてしまうのである。つまり、近代的リアリズムに適うような理屈づけをおこなったのである。
- ④ 「松井さんの感性では」、人間、動植物、事物、「そのいずれもが等価なはず」と述べているが、松井さんはチョウを捕まえようとしていたのであり、チョウはチョウのまま松井さんの前に現れることはできなかつたのである。鶴谷自身「『夏みかん、ぼうし、男の子』までは意識して『相手の身』になっているが、肝心の『もんしろちょう』もそう言えるのかという点になると疑問なしとしない。」と述べているのだから、そこと矛盾しないか？
- ⑤ そして、鶴谷は「作者」と言っているが、等価に見て語っているのは〈語り手〉である。
- ⑥ 結局、チョウの声が聞こえたわけを松井さんの人物像に帰すという、従来の、「やさしい松井さん」だから聞こえたという読みと同次元の論になってしまっている。結果的に、主人公主義に陥っている。
- ⑦ 主人公主義と、松井さんを「現実」と「非現実（超現実）」の蝶番とする捉え方は通底している。
- ⑧ 次は、山中勇夫「『白いぼうし』の授業構想—〈世界〉の同時存在と、その相互浸食を体感する—」（前掲『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 小学校』所収）を見てみよう。

男の子と松井さんの双方に、主体には理解不能な異次元の出来事（魔法）が訪れるという共通点があり、それらが対比的に示される構造によって、松井さんに訪れた現象の裏側にも何らかの仕掛け人がいることが暗示されています。

(略)

以上、複数の〈世界〉の同時存在と、それらの融和・浸食による、条理の揺らぎを体感する『白いぼうし』の授業実践について述べました。

(略)

これに対し、「見えない」ものを見ようとする、言葉にできないものを分かち合おうとする教室は、自身の認識を越えた他者の言葉や、思いもよらない出来事に対する寛容さを身につけていくように思います。

- ⑨松井さんが男の子にかけた〈魔法〉は「主体には理解不能」かも知れないが、リアリズムの中のマジックである。だから、男の子も、この後、石が帽子の上に載せてあることなどから、「誰かが入れ替えたのではないかと」、「異次元」でなく、いわば「同次元」の推量ができなくはないのである。
- ⑩ところが、松井さんの車に女の子が出現したり、チョウの声が聞こえたりするのは、確かに「主体には理解不能な異次元の出来事」である。
- ⑪「何らかの仕掛け人」とは〈語り手〉のことだと思うが、この文章では明言していない。『文学授業のカンドコロ』の方を読むと、仕掛けているのは「『松井さん』や語り手すらあずかり知らない世界の作為」と述べているから、それを指しているのかも知れない。
- ⑫その「作為」に夏みかんの愛の機能が大きく関わっている肝心の点については全く触れていない。本書の構成として、最初に田中の作品研究があり、それを承けての山中の授業構想であるはずにも関わらず、である。
- ⑬『『白いぼうし』という作品は、松井さんの〈世界〉が、チョウの〈世界〉と接点を持つ物語、もしくはチョウたちの〈世界〉が浸食してくる物語と考えられます。では、いったいつから、どのような形で、浸食してくるのでしょうか、(略)」と述べているが、なぜ「浸食」してくるのかが最重要であり、だからこそ「第二次四読目(一時間)」は「『松井さんに声が聞こえたのはなぜなのか』について考える」となっているのだろうが、山中の明確な見解は述べられていない。
- ⑭さらに、助川幸逸郎・幸坂健太郎編著『文学授業のカンドコロ』(文学通信 2022年)を見てみよう。

#### スケガワ先生

「白いぼうし」では、「男の子」に訪れた魔法(ちょうちょと夏みかん)に関しては、その種明かしが語り手には見えている。語り手は「松井さん」の目線を通して、ちょうちょと夏みかんの種明かしをちゃんとしている。でも、ちょうちょと「女の子」の関係については、「松井さん」はおろか、語り手にも見えない。見えないことが見えないままに示されているんだね。

#### ヤマナカ先生

え? だったら、その種明かしが見えないって言えばいいじゃないですか?

#### スケガワ先生

うーん、「見えない」って言ってしまったら、「見えない」状態にある自分を自覚(認識)していることになるよね。そうではなくて、「見えない」自分すら「見えない(認識・自覚できていない)」語り手がここでは暗に示されているんだ。

(略)

#### スケガワ先生

でも、「男の子」に訪れた魔法と「松井さん」に訪れた魔法が、一緒に語られることで、読者には「松井さん」に訪れた魔法にも、何か「松井さん」や語り手にすらわからない仕掛け人がいることが示される。「男の子」の知らないところで起こった作為が「男の子」を翻弄したように、「松井さん」にかかった魔法も、「松井さん」や語り手すらあずかり知らない世界の作為によって、「松井さん」を翻弄しているのかもしれない。こんなふうに読むことができる。語り手には認識できない、何か別の世界の論理が裏で働いていることが暗に語られていると言えるんだ。

- ⑮言語によって〈言語以前＝了解不能の世界〉をどう表現する(現出させる)か、その難問に

応えたのが〈語り手〉の語りであり、その基底にあるのが、人間世界とチョウの世界を等価に捉える〈語り手〉の世界観認識である。そのように〈語り手〉を捉える視座が必須であろう。

- ⑩前述の通り、松井さんへの「魔法」の仕掛け人は〈語り手〉である。松井さんには〈了解不能の他者〉である〈言語以前の世界〉は確かに「あずかり知らない世界」であるが、〈語り手〉は読み手の前に現出させるように語っている。

### (3)時代とその特徴をおさえる

- ①「松井さんもお客も、白いワイシャツのそでを、うでまでたくしあげていました。」
- ②「速達」⇒今なら宅配便。大和運輸が「宅急便」を始めるのが1976年だから、これはそれより前の、郵便局から（もしくは国鉄で）送るのが普通だった頃のお話である。
- ③タクシーの窓が空いているらしいこと。（だから、松井さんが後部座席のドアを開閉していないのにも関わらず、チョウの化身である女の子が自由に出入りできる。）
- ④タクシーにクーラーがつくのは1960年代後半。したがって、このお話はそれ以前のお話。（ちなみに『車のいろは空のいろ 白いぼうし』の「あとがき」は1968年に書かれている。）
- ⑤「しんし」という呼び方も少し古めかしい。
- ⑥日本の戦後の高度経済成長期は1954年～1973年とされている。（東京オリンピックは1964年）
- ⑦都市化＝「いってもいっても、しかくいたてもものばかりだもん。」
- ⑧「男の子」にとってチョウが珍しいものになっている。
- ⑨松井さんは地方（田舎）から出てきて都市で働いている人。（地方の労働力の都市への流入。『車のいろは空のいろ』の最初の作品『小さなお客さん』では「松井五郎」とある。）

### (4)〈語り手〉の位相に立って対象人物のまなざしで見ると（松井さんのまなざしを離れてチョウのまなざしから見る）——人間の文明・文化の加害性

- ①都市でタクシー運転手として働いている松井さんも、日本の高度経済成長の一翼を担っている。チョウの世界に対する加害者の一人。（車の排気ガスも含めて。）
- ②対象人物であるチョウのまなざしから読むと、人間存在の「罪」(sin)の問題が見えてくる。
- ③日本の戦後の高度経済成長はチョウたちの生息域を狭め、公害問題を引き起こしたことからも分かるように環境自体を悪化させた。
- ④また、昆虫採集というのは、人間の文化の一部であるが、昆虫の側から見たら、恐ろしく、おぞましく、不条理なものである。食物連鎖と違って、人間が生きていくために必要な所業ではない。
- ⑤松井さんも「せっかくのえもの」と心内語で言っている通り、そうした人間の文化に普通に染まっている人である。
- ⑥そうした、いわば、私たちにとって自然なことであり、疑いもしないことを、相対的に捉えているのが〈語り手〉である。
- ⑦閉じ込められたチョウにとっては「白いぼうし」は牢獄そのもの、チョウの「生」を脅かすものにほかならない。
- ⑧チョウたちのいる「なの花よこ町」の世界は、「小さな団地のまえの小さな野原」という、どちらかというとい狭い世界であるが、そこに「二十も三十も、いえ、もっとたくさんとんで」というのは、活動的で賑やかな光景であり、人間たちに侵されない、チョウたちのワンダーランドと言ってよいような世界であり、実際以上に広く感じられる。「たくさんとんで」ということといい、「おどるようにとんでいる」というのはチョウたちの旺盛な生命力を感じさせる。
- ⑨それは、場所は狭いかも知れないが、人間たちと同じだということである。「横町」の狭さ、居住人口の密度の濃さ、賑やかさを思い起こさせる。
- ⑩以上は語り手の位相から見ないと分からないことである。語り手は、チョウの世界を人間の世界と等価に語っている。

### (5)チョウは松井さんに声を聞かせようとしたのではない／松井さんがやさしい人だからチョウの声が聞こえたのではない

- ①チョウは、「よかったね。」「よかったよ。」を松井さんに聞かせようとして言っているの

はない。これはあくまでも家族も含めて仲間内で言い合っている言葉である。

- ② 松井さんに向かって、「ありがとう。」と感謝の言葉を言っているわけでも勿論ない。
- ③ 松井さんはチョウの声を聞いて、いわば事後的に、自分が白いぼうしをつまみ上げて偶然助けたことに気がつくだろうし、女の子がチョウだったのではないかと考えもするだろう。(松井さんは一連の出来事に因果関係をつけて理解することになる。)
- ④ 語り手は松井さんに寄り添って語っているから、どうしても読み手も主人公主義の読みに陥りやすい。松井さんのやさしさを読み、無数のモンシロチョウの「小さな小さな声」が松井さんに聞こえてきたわけを松井さんのやさしさに帰着させる読みになりやすい。
- ⑤ 男の子のチョウを帽子の中に閉じ込めておく行動と、飛び出したチョウをつかまえようとして帽子を振り回す松井さんの行動が、チョウにとってはいかに恐ろしいものであるか、チョウの立場に立つとよく分かるが、松井さんにも勿論そのような相対化はできない。松井さんに備わっているのは、世間一般の、尋常な意味での「やさしさ」に過ぎない。

**(6) 〈語り手〉は、チョウの声が松井さんには聞こえたと言語することで何を伝えたかったのか**

- ① 母の愛情が働いて、松井さんは機嫌よく、夏みかんのにおいをタクシーのお客にお裾分けする。
- ② 母の愛に包まれている松井さんは、さらに、帽子を大切に思う気持ちから帽子を取る→結果的にチョウを助ける→男の子に申し訳なく思う気持ちと好意・愛情から夏みかんを置く。男の子がどういう反応をするかは分からないが、松井さんの母の愛は男の子のところに結果的に届く。
- ③ チョウは助かりたくて(でも疲れているから遠くへ逃げることができず)、緊急避難として松井さんのタクシーの空いていた窓から車内へ入り込む。と同時に、チョウは夏みかんのにおいに誘われてタクシーに乗ったのかも知れない。
- ④ 以上から、夏みかん=母の愛がチョウを救済している、と言える。
- ⑤ 〈語り手〉が松井さんにチョウの声が聞こえると語ったのは、夏みかんの愛の力がチョウに届いていることを松井さんに知らせるためである。語り手が仕組んだことである。
- ⑥ 同時に、チョウたちの家族愛(仲間愛)を松井さんに伝えている。
- ⑦ 自分が結果的にチョウを助けていたということを松井さんは理解するとすぐに、やさしい人柄であるだけに、逃げ出したチョウを掴まえようとした自分の罪に気づき、罪意識を持つであろう。つまり、松井さんは自分のやったことを、何に対してもやさしかったわけではなくと相対化できるようになるのである。
- ⑧ その罪意識が生まれることによって、松井さんには愛というものの尊さが感じられてくるのではないかと考える。そこから、自分の母の愛をいっそう有り難いものとしてあらためて捉え直す、つまり母の愛の本当の価値に気づいていくことになるのでは、と想像できる。そういう重要な、愛に対する認識の変化・深まりが松井さんには訪れると思われるのである。
- ⑨ 〈語り手〉は、私たち人間がその罪に気づくことによって、愛の尊さが分かること、愛の働きとは、〈生きとし生けるもの〉を繋いでいく働きであり、〈加害〉の〈罪〉を超えていく働きであるという認識を読み手にもたらす。
- ⑩ 「よかったね。」「よかったよ。」は、松井さんと母親、男の子と母親にも響いていく。チョウとチョウの家族(仲間たち)も含めて三つの家族愛が夏みかんによって浮かび上がってくる。
- ⑪ 「車のなかには、まだかすかに、夏みかんのにおいがのこっています。」とあり、全体が母の愛に包まれたままで終わる。この夏みかんのにおいは、いわば救いの光である。
- ⑫ この〈小説童話〉の題名は、たとえば、上述のように重要な働きをなす「夏みかん」であってもよさそうだが、「白いぼうし」である。爽やかなイメージの「白いぼうし」が、囚われたチョウにとっては恐ろしい牢獄である。チョウのまなざしから見ると、意味は反転する。手持ちの、日常的な世界観認識を倒壊させる内容にふさわしい題名が「白いぼうし」であると言えよう。